

晋 書 音 義 音 韻 考

大 島 正 二

本誌五十五卷三号所載の拙論「史記索隱・正義音韻考」(以下、前論と略称)に於て、筆者は、唐代を通じてその權威を保ち続けたと推測される『切韻』や、或は唐代秦音を伝えていると説かれる『慧琳一切経音義』(以下『慧琳』と略称)等が準拠した規範とは多少異なつた、より近世音的特徴をも含む字音の体系が其等と同時に併存していた可能性について論及し、更に、この字音の体系は、その時迄に整理を見た数篇の断片的な音義注から窺える音韻的特徴に拠つて仮定されたものであることから、今後とも資料を補いつつ詳細な検討が必要であると述べた。その後、前論で未整理資料として挙げた第二種音義類の内の、何超『晋書音義』三卷(西曆七四〇年頃成書)⁽³⁾の整理を一往終えたので、その一端を前論の資料面に於ける補足をも兼ねてここに報告し、併せて、その整理結果が上述の仮定を尚容認するか否かについての検討にも及びたいと思う。

何超『晋書音義』に見える音注の内、整理の基準とする『切韻』⁽⁴⁾の体系に投影した結果、体系上のずれを示すと大略解される例のみを採り、⁽⁵⁾上掲拙論の体裁に略倣いつつ以下に示す。司馬貞『史記索隱』(西曆七一九―七三六

年迄の或る年に成書。以下『索隱』と略称)、張守節『史記正義』(西曆七三六年成書。以下『正義』と略称)にも見える例はその旨を付記して参考に供す。

声類

声類に見られる特徴を挙げる。

一 『広韻』には、帰字の声母が重脣音である反切の上字として後に軽脣音化する声母が用いられている例が多いが、それが改められている例が見える。『索隱』『正義』に見える。

疾〔広〕甫遙／必遙(中八オ三)⁶⁾。彰〔広〕方閑／通還(中一七ウ二)、布蠻(中一ウ七)、補閑(上四ウ二)。彰〔広〕府巾／卑民(下二ウ二)。編〔広〕方典／歩典(上二〇オ四)。燮〔広〕甫遙／必遙(下二〇ウ二)。杓〔広〕甫遙／必消(上七ウ・九)。驪〔広〕甫嬌／彼喬(中二六ウ九)。縹〔広〕敷沼／匹妙(中一五オ一〇)。飄〔広〕撫招／頻宵(中六オ一〇)。圯〔広〕符鄙／普弭(下二〇ウ一〇)。甕〔広〕扶歴／蒲歴(中二オ三、中二二ウ二、下九オ八)。陴〔広〕符支／頻卑(中二ウ九)。裨〔広〕符支／頻卑(上七ウ四、中五オ九、中一九オ三、下一九ウ四)。莠〔広〕武道／莫候(下一一オ七)。蕞〔広〕武庚／莫行(中一六オ一)。瞿〔広〕武幸／芒耿(下一八ウ八)。藐〔広〕亡沼／妙小(下二二ウ四)。

(A)『広韻』は「鑣」に作る。

反面、帰字の声母が重脣音である反切の上字に軽脣音化声母字の用いられている例も見える。

。『広韻』でも軽脣音化声母字が上字として用いられている例。『索隱』『正義』に見える。

疾〔広〕甫遙／甫遙（中二四〇七）。昉〔広〕甫盲／甫彰（上一二ウ六、中一ウ五）。燮〔広〕甫遙／甫遙（上七ウ九）。鑣〔広〕甫嬌
 ／甫驕（上七〇三）。薰〔広〕甫嬌／甫喬（中二三〇九）。彰〔広〕府巾／甫巾（上一ウ四、中一ウ七）、甫斤（中一四〇四）。彬
 〔広〕府巾／府巾（下三ウ一〇）、俯巾（下二〇九）、甫巾（下二三ウ六）。斌〔広〕府巾／府巾（上三〇九、上二ウ二、中六〇九）、
 甫巾（中一五ウ六）。彰〔広〕方閑／方閑（上一ウ四）。扁〔広〕方典／方典（中二ウ二）。編〔広〕方緬／方緬（中七ウ七、中二
 一ウ九、下五〇一〇、下七ウ五、下一八〇三三）。窆〔広〕方驗／方驗（下四ウ五）。縹〔広〕敷沼／敷沼（上一三ウ一〇、上一五〇
 三三）。丕〔広〕敷悲／敷悲（上一ウ八）。扁〔広〕芳連／芳連（下一六〇六）。癖〔広〕芳辟／芳辟（中七〇八）。愠〔広〕芳逼／芳逼
 （下一九〇一）。烹〔広〕撫庚／撫庚（中一三〇五）。漂〔広〕撫招／撫招（中一四ウ八、下九ウ三）。圮〔広〕符鄙／符鄙（上四ウ五、
 上一六ウ八、中五〇一、中八〇六、中一三〇二、中二〇四、下二〇五、下四ウ一、下一八ウ二）。裨〔広〕符支／符支（下二ウ
 七）。否〔広〕符鄙／符鄙（中九ウ九、中一四ウ六）。邳〔広〕符悲／符悲（上一〇〇二、中九〇一〇）。飄〔広〕符霄／符霄（中八〇
 一〇）。瓢〔広〕符霄／符霄（下二ウ六）、符遙（下二三ウ五）。熨〔広〕符逼／符逼（上六ウ五、下六〇九）。懷〔広〕符逼／符逼
 （中八〇八、中二ウ八、中六ウ二、中二ウ一〇、下七ウ四、下一八ウ九、下二ウ二）。櫛〔広〕房連／扶然（上一五〇六）。貌
 〔広〕房脂／房脂（下一〇七、下九ウ七）。毗〔広〕房脂／房脂（中五ウ一〇、中二〇ウ六）。躡〔広〕房益／房益（下二〇ウ九）。蒔
 〔広〕亡毒／亡毒（中六ウ四）。糜〔広〕亡果／亡可（下一三ウ九）。諺〔広〕亡沼／亡少（中一八ウ七）。曹〔広〕武登／武登（下七〇
 四）。名〔広〕武并／無騁（中二〇五）。鄺〔広〕武庚／武庚（上一〇〇四）。宣〔広〕武庚／武庚（上一五〇七）。采〔広〕武移／武
 移（中三〇六）。糜〔広〕武悲／武悲（中一四ウ九、中一九〇二）。泯〔広〕武盡／武盡（上六ウ四、中一〇一〇、中七ウ七）。珉〔広〕
 武巾／武巾（上五〇二、下六〇六）。繆〔広〕武彪／武彪（中一ウ一、中二ウ九、下三〇七）。

(A)『殿本』は「𠂔^反」に作るが『萬曆本』『和刻本』に從う。^(補注1)

(B)『広韻』は「𠂔」に作る。

。『広韻』では重唇音声母字が上字として用いられている例。『索隱』『正義』に見える。

幅^(A)〔彼側／芳逼(中七ウ八、中二オ四)。榜^(A)〔北孟／方孟(中一六オ九)。韓^(A)〔邊孔／方孔(下二三ウ二)。岬^(A)部迷／扶雞(中一六ウ三)。億^(A)〔蒲拝／防介(下九オ三)。𦵏^(A)〔蒲北／扶北(上六ウ五)。𦵏^(A)〔薄萌／扶萌(中一四ウ二)。謾^(A)〔母官／武安(上一六ウ六)。𦵏^(B)〔莫駕／亡嫁(上九ウ一〇)。𦵏^(A)〔模本／亡本(中一八ウ八、中一九ウ七)。萌^(A)〔莫耕／亡行(上九ウ七)。

(A)『広韻』は「𦵏」に作る。

(B)『広韻』は『鄺』に作る。

二 輕唇音声母^(A)非・敷・奉^(A)三母の混同を示す例が見える。

(一)非^(A)非^(A)敷^(A)両母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

仿^(A)〔妃^(A)両^(A)敷^(A)、説文曰相似也／方往^(A)非^(A)(中三オ八)、苟少有彷彿^(A)可以崇濟先典(列伝五)。紡^(A)〔妃^(A)両^(A)敷^(A)、績紡／方^(A)両^(A)非^(A)(中一オ六、躬執紡績(列伝一))。𦵏^(A)〔分物^(A)非^(A)／敷物^(A)敷^(A)(中二〇ウ一〇)。^{(A)(8)}

(A)本例は『広韻』で何超音と同音を示す通用字「𦵏」も求められる。

(二)非^(A)非^(A)奉^(A)両母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

盜^(A)〔扶雨^(A)奉^(A)、水名在鄴：／音府^(A)非^(A)(中六オ三)、遂使漳滹蕭然(列伝九)。𦵏^(A)〔縛謀^(A)奉^(A)、鼓槌^(B)／甫于^(B)

《非》(上八〇一)、旗端四星南北列曰天桴鼓桴也(志一)。枹(広)縛謀《奉》(C)(D)甫于《非》(上六〇三、上二六〇三)、使其子胤侵枹罕(帝紀七)、枹罕(志一九)。怫(広)符弗《奉》、怫鬱／音弗《非》(E)(中四〇一)、絶而不離音怒怫鬱放逸生奇(列伝六)。桴(広)符分《奉》、複屋棟也／音分《非》(下一一〇四)、於是築長阬起桴槽(列伝六)。

(A) 『晋書音義』に見える被注字は「桴」(広)縛謀切、齊人曰屋棟曰桴也；芳無切《敷・虞》、屋棟又音浮であるが、注の「本作枹」に拠り、何超音を『広韻』に見える「枹」字音(但し「桴」字と同音)と比較する。

(B) 反切下字を『殿本』『萬曆本』は「予」《魚上》韻字)に作るが、『和刻本』に従い之を改める。^(補注2)

(C) 『殿本』『萬曆本』は「于甫反」に作るが、『和刻本』に従い之を改める。^(補注3)

(D) 「枹」の『広韻』に見える音義注は、(一)「防無切《並・虞》、枹罕(唐名……)」「縛謀切《並・尤》、鼓槌」(この他に「布交切」)である。『晋書音義』には「甫于反又音扶(上六〇三)」「音扶又甫于反」(上二六〇三)(何れも「枹罕」の「枹」に対する音注)と見えるので、本稿は「音扶」を『広韻』の音義注(一)と、「甫于反」をその(二)「枹罕」の義の記載は見えないが)と比較した。

(E) 何超は同じ語(怫鬱衝流(列伝六)に、符弗反《奉》(下一〇ウ三)とも注音している。⁽⁹⁾

(三) 《敷》《奉》両母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

枹(広)縛謀《奉》、鼓槌／芳呼^(A)《敷》(中一九ウ七)、援枹曹衛(列伝三二)、音孚《敷》(中一七ウ三)、枹鼓桴鳴(列伝二六)、音浮《敷》(下一三〇九)、因振袖揚枹(列伝六八)。

(A) 反切下字については、韻類(一)六(二)(A)を参照。

三 全濁声母と全清声母・次清声母との混同を示す例が見える。

三・一 全濁声母と全清声母との混同例

(一) 《並仄》《幫》両母混同の例。『索隱』(傍証例のみ)、『正義』に見える。

杷〔広〕白駕《並去》、田器／音霸《幫》(下一〇九)、劉惔以犀杷麋尾置棺中(列伝六三)。(併〔広〕北孟《幫》／步孟《並去》(中八ウ四))。

(二) 《定平》《端》両母混同の例⁽¹¹⁾

碑〔広〕都奚《端》／堂奚《定》(中二〇オ三)、幽州刺史鮮卑段匹碑(列伝三)^(A)。

(A) 本例に於ける「碑」の義は『広韻』に見える義注「漢有金日碑…」とは異なるが、何超は同じ語(依段匹碑(帝紀五)、随琨投段匹碑(列伝一四)、往段匹碑遣使(列伝六八))に音低《端》(上五オ四、中八ウ一〇、下一三オ七)とも注音しているので、両母混同の例として挙げる。

(三) 《澄仄》《知》両母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

貯〔広〕直呂《澄上》説文曰長貽也^(A)／張呂《知》(上五ウ五、中七オ八、中一〇ウ六)、以貯酒焉(帝紀六)、悉貯琉璃器中(列伝二二)、譬猶囊漏貯中(列伝一八)。

(A) 『説文』には亦「積也」と見える。朱駿成『説文通訓定声』に拠ると「長貽也」は「貯」の義という。⁽¹²⁾

(四) 《澄平》《知》両母混同の例

〔講〕〔広〕張流《知》／音疇《澄》(二〇オ九)

(四) 《從_去》《精》 兩母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

漬〔_広〕疾智《從_去》浸潤又漚也／子賜《精》（中一六〇六）、瀝漬微猷（列伝二五）。薦〔_広〕作甸《精》／在見《從_去》（上

一五〇一〇）^(A)、而饑疫荐臻（志一八）。瓚〔_広〕藏早《從_上》／作早《精》（中一七ウ二）、大將干瓚作難（列伝二〇）^(B)。嚶〔_広〕玆

損《精》、嚶啗／慈損《從_上》（中二六〇五）、誹謗嚶啗（列伝二五）^(C)。阜〔_広〕昨早《從_上》、阜隸：／作早《精》（上二三〇

四、中四〇九）、阜輪犢車（志二四）^(D)、昔樂卻降在阜隸（列伝六）^(E)。

(A) 『晋書音義』には「荐與薦同在見反」と見える。「荐」は〔_広〕在甸切《從_去》、重也仍也再也。

(B) 或は「昨」《從_去》母字）^(補注4)の誤写か。

(C) 本例に於ける「瓚」の義は『広韻』に見える義注「拒鬯宗廟之盛禮…」とは異なるが、何超は同じ語（翼部將于瓚。戴義等（帝紀八）に昨早反《從_上》（上六〇九）とも注音している）、兩母混同の例として挙げる。

(D) 或は「玆」《精》母字）^(補注5)の誤写か。

(E) 何超は同じ語（遊声嚶啗（列伝四一）、人情嚶啗（列伝四九）、内外嚶啗（列伝六八）、嚶啗何辭而起（載記九）に玆損反《精》（下一ウ一、下五〇四、下一三〇一〇、下一六ウ一〇）とも注音している。

(F) 本例に於ける「阜」の義は『広韻』に見える義注とは異なるが、何超は同じ語（阜輪車牛一乘（列伝二一）に昨早反《從_上》（中六ウ八）とも注音しているので、兩母混同の例として挙げる。

(六) 《從_平》《精》 兩母混同の例

齊〔_広〕徂奚《從_平》、整也中也：／子夷《精》（中一五ウ九）、我簋斯齊（列伝三五）、音資《精》（上一ウ四、上二ウ四）、三

年之喪始同齊斬(志一〇)、以膏齊斧(志二三)。(焦〔広〕即消《精》／音譙《從》(下二〇五)。

(4) 《羣平》《見》兩母混同の例。『正義』に見える。

鍵〔広〕居言《見》…、又鍵為郡／其焉《羣》(上二六〇六)、南安鍵為地震(志一九)、渠焉《羣》(下七〇一〇)、下一八ウ六、(下一八〇二三)、鍵為太守卞苞(列伝五四)、美水令鍵為張統說熙曰(載記一五)、其連《羣》(上四〇八、上八ウ八)、鍵為地震(帝紀三)、…汶山鍵為益州六郡(志四)。句〔広〕其俱《羣》縣名／音俱《見》(中一七〇九)、榮陽句驪本居遼東塞外(列伝二六)、音駒^(A)《見》(下一五ウ九)、時高句麗爾慎致其桎矢(載記五)。軒〔広〕居言《見》、…文驪軒縣在張掖／音虔《羣》(上九ウ六、下二〇九)、驪軒(志四)、徙頭美驪軒二千餘戶(載記二六)。

(A) 『殿本』『萬曆本』は「句音句」と作るが、『和刻本』に従い之を改める。^(補注。)

(4) 《曉》《匣》兩母混同の例

訶〔広〕虎何《曉》、責也怒也／乎何^(A)《匣》(中二〇五)、公遂訶臣(列伝二〇)。^(B)嫌〔広〕許威《曉》、似蛤出海中也／乎緘^(C)《匣》(下一一ウ二)、或至海邊拘蟻蟻以資養(列伝六四)。磁^(D)〔広〕戸萌《匣》、玉篇云石声也／火宏《曉》(中一五ウ一)、鼓聲磁礧以碎礪(列伝二五)。

(A) 或は「呼」(《曉》母字)の誤写か。^(補注。)

(B) 何超は同じ語(成都王顯見而訶謚(列伝三三)、則切厲訶辱(列伝三六)、言語訶叱(列伝六五))に呼何反《曉》(中一四〇二、中二ウ三、下二〇八)とも注音している。

(C) 『広韻』は「蟻」に作る。

(D) 『広韻』は「磁」に作る。

三・二 全濁声母と次清声母との混同例

(一) 《並^仄》《滂^平》両母混同の例。『索隱』『正義』に見える。

圯〔広〕符鄙《並^上》、岸毀又覆也／普弭《滂^平》(下一〇ウ一〇)、衆塗圯塞(列伝六二)。

(二) 《定^平》《透^平》両母混同の例。『索隱』『正義』(何れも傍証例のみ)に見える。

〔他〕〔広〕託何《透^平》／音陀《定^平》(上三ウ八、上一〇オ一〇)。

(三) 《定^仄》《透^平》両母混同の例。『索隱』に見える。

繇〔広〕他魯《透^平》、繇稻／陋古^(A)《定^上》(中二三ウ一)、多繇生於決泄(列伝二二)。〔軟〕〔広〕徒蓋《定^去》／音太《透^平》(上九オ一〇)。

(A) 『広韻』は「陀」に作る。

(四) 《從^平》《清^平》両母混同の例。『索隱』に見える。

鱸〔広〕自秋《從^平》、魚名二月有之／音秋《清^平》(中二三オ六)、振光耀以驚沈鱸(列伝二一)。

(五) 《崇^平》《初^平》両母混同の例。

儉〔広〕助庚《崇^平》、楚人別種也／初庚《初^平》(下三ウ三、下四オ七)、郟憎有儉奴(列伝四五)、僕雖與人幾為儉鬼(列伝四七)^(A)。

(A) 何超は同じ語(呉人謂中州人曰儉。(列伝二八)、不足齒之儉耳。(列伝五〇)、此間有儉父欲作三都賦(列伝六二)に助庚反《崇^平》(中一八オ八、下五ウ六、下一〇ウ五)とも注音している。

(六) 《羣平》《溪》両母混同の例。『正義』に見える。

〔卷〔広〕巨員〕《羣》／丘員《溪》〔上九オ五〕。

四 《泥》《娘》両母の混同を示す例が見える。『索隱』（傍証例のみ）、『正義』に見える。

赧〔広〕奴板《泥》／女版《娘》〔上一四オ九〕、王赧云季徙都西周〔志一六〕。^(A) 儒〔広〕乃亂《泥》、弱也／女亂《娘》〔中二ウ六〕、儒夫立志〔列伝四〕。

(A) 本例に於ける「赧」の義は『広韻』に見える義注「慙而面赤…」とは異なるが、何超は同じ語（赧。王逃賁〔帝紀四〕、宣王之後到于赧。王〔列伝一六〕、逮王赧。即世〔列伝二九〕）に奴版反《泥》〔上四ウ八、中九ウ六、中一八ウ三〕とも注音しているので、両母混同の例として挙げる。

五 齒頭音系列に於ける全濁声母《從》《邪》の混同を示す例が見える。『索隱』（傍証例のみ）、『正義』に見える。
灋〔広〕徐刃《邪》、水名／疾胤《從》、水経曰灋水出襄郷県…〔下一九オ九〕、盛遣軍臨灋口〔載記一八〕。灋〔広〕徐刃《邪》、燭餘／疾忍《從》〔下八オ七〕、季龍自斃遺灋游魂〔列伝五六〕、疾刃《從》〔上一三オ一〇、中二三ウ一、下一七オ九〕、經書咸灋〔志二五〕、多灋簡斷札〔列伝二一〕、江具有遺灋之虞〔載記一一〕。^(A) 雋〔広〕徂兗《從》／似轉《邪》〔上一〇オ七〕、辭兗《邪》〔下一四オ一〕。

(A) 何超は同じ語（宮闕灰灋〔帝紀七〕）に徐刃反《邪》〔上六オ四〕、（自此之後餘灋不盡〔列伝二六〕）に似刃反《邪》〔中一七オ七〕とも注音している。

六 正齒音三等系列に於ける全濁声母《船〔牀三〕》《常〔禪三〕》両母の混同を示す例が見える。『索隱』『正義』に

見える。

褶〔広〕是執《常》、袴褶／神執《船》〔下二〇三、下一一ウ八〕、因以袴褶遺之〔列伝四二〕、贈以韋袴褶一具〔列伝六四〕、神入《船》〔上一三ウ九、中六ウ五〕、黑袴褶將一人〔志一五〕、俱著布袴褶〔列伝一〇〕。

七 正齒音の二等と三等との混同を示す例が見える。

〔一〕《莊》〔照三〕《章》〔照三〕《両母混同の例》

輜〔広〕側持《莊》、輜駟車／旨而《章》〔下六オ三〕、徐龕襲取豹輜重於檀丘〔列伝五一〕^(A)。

〔A〕 何超は同じ語（留輜。重於都陸〔帝紀二・列伝三〕、時輜。重金寶甚多〔列伝四六〕、浩懼棄輜。重〔列伝四七〕）に側持反《莊》〔上一三オ七、中二オ六、下三ウ八、下四ウ四〕、（擊賊退之獲其輜。重〔列伝一三〕）に側狸反《莊》〔中八ウ二〕とも注音している。

〔二〕《初》〔穿二〕《昌》〔穿三〕《両母混同の例》。『索隱』『正義』に見える。

〔龕〕〔広〕楚綸《初》／昌茂《昌》〔上一一オ八〕。

〔三〕《生》〔審二〕《書》〔審三〕《両母混同の例》。

臙〔広〕式竹《書》、爾雅云臙黒虎／山六《生》、說文黒獸也〔下四ウ三〕^(A)、以先爵賜次子臙爲關内侯〔列伝四七〕。

〔A〕 何超は同じ語（拉臙。挫解弛〔列伝二五〕）に音叔《書・屋三》〔中一六ウ八〕とも注音している。

八 《知》《章》〔照三〕《両母の混同を示す例が見える》。『索隱』（傍証例のみ）、『正義』に見える。

〔援〕〔広〕陟劣《知》／之劣《章》〔上一九ウ九〕。

以上が声類に見られる特徴である。これ等は、幾つかの例外を除いて、何れも中古音系から近世北方音系への変遷過程に於ける音韻的特徴として説き得るものである。内、二(二)三、三、五、七、八は『慧琳』の反切からは窺えない。

韻類

韻類に見られる特徴を、『慧琳』の反切にも現われている特徴と然らざるものとに大別・整理して挙げる。

〔I〕『慧琳』の反切にも現われている特徴

一 重韻の通用を示す例が見える。

一・一 I 韻類¹⁴⁾

(一) 《東一・屋一》《冬・沃》兩韻通用の例。『索隱』『正義』に見える。

梔〔広〕古沃《沃》、手械紂所作也／古屋《屋一》(下七ウ六)、若釋梔梔焉(列伝五五)^(A)。〔形〕〔広〕徒冬《冬》／徒東《東一》

(中五オ七)。

(A) 何超は同じ語(徒以曲畏爲梔。儒學自桎(列伝二))に古沃反《沃》(中二三オ六)とも注音している。

(二) 《哈去・灰去》《泰開・合》兩韻通用の例。『正義』に見える。

埭〔広〕徒耐《哈去》、以上竭水／達頼《泰開》(下四ウ九)、以水牛索埭(列伝四八)。艾〔広〕五蓋《泰開》、…亦姓／五愛《哈去》(上二ウ一〇)、王基州泰鄧艾石苞典州郡(帝紀二)^(A)。未〔広〕盧對《灰去》、未耜…／盧會《泰合》(中一〇ウ五)、手

執未相(列伝一八)^B。

(A) 何超は同じ語(及王粹董艾等十餘人(列伝一五))に五蓋反《泰》(中九オ八)とも注音している。

(B) 何超は同じ語(置未。相於軾上(志一五))に盧対反《灰》(上一三ウ六)、(乃擇元辰載未。相(列伝四二))に盧潰反《灰》(下一オ七)とも注音している。

(B) 《賈・合》《談・蓋》兩韻通用の例。『索隱』に《合》《蓋》兩韻通用例が見える。

愀(広)徒甘《談》／徒含《覃》(中四オ二、中一八ウ八、下一二ウ三、下一一オ八)、後劉愀謝尚共論中朝人士(列伝六)、執前將軍謝愀(列伝二九)、又以征虜將軍劉愀監沔中軍事(列伝四三)、子愀以父素行高潔(列伝六三)^A。聃(広)他酣《談》、耳漫無輪又老氏名：／他含《覃》(上六オ七、中一ウ二)、立皇子聃爲皇太子(帝紀七)、如聃之齡(列伝一)。統(広)都敢《談》上／丁感《覃》(中二ウ四)、荀勗馮統之徒甚忌之(列伝四)、都感《覃》(中四オ五、中五ウ四)、統則愀之弟也(列伝六)、侍中馮統(列伝)^B。臘(広)盧蓋《蓋》、臘蜡／盧合《合》、前至臘月纏汝髮(列伝三三)。蹋(広)徒蓋《蓋》、踐也／徒合《合》(下六オ七、下一〇ウ六、下一六オ五、下一七オ六)、使人蹋鞍(列伝五一)、蹋太山令東覆(列伝六六)、渡海戍蹋頓城(載記六)、蹋而罵之曰(載記一〇)。合(広)侯閣《合》、合同：／音闔《蓋》(中一七ウ四)、兩邦合從(列伝二五)。

(A) 本例に於ける「愀」の義は『広韻』に見える義注「憂也」とは異なるが、何超は同じ語(沛國劉愀(列伝四五)、安妻劉愀妹也(列伝四九)、爲王濛劉愀所知(列伝五一))に徒甘反《談》(下三ウ一、下五オ四、下六オ四)、(諸尚公主者劉愀桓温皆爲之(志一四))に大甘反《談》(上一三オ七)とも注音しているので、兩韻通用の例として挙げる。

(B) 本例に於ける「統」の義は『広韻』に見える義注「冕前垂也…」とは異なるが、何超は同じ語(是時帝納

馮統之間(志一七)、馮統姦倭(列伝一五)に都敢反《談》(上一四ウ九、中九オ七)とも注音しているので、両韻通用の例として挙げる。

一・二 II 韻類

(一) 《皆》《夬》 両韻通用の例。『正義』に見える。

蠶〔夬〕丑轄《夬開》、毒蟲／丑芥《皆開去》(中九オ四、中一三オ一〇、下七ウ六、下一八ウ九、上一二ウ六)、蜂蠶作於懷袖(列伝一五)、蜂蠶止毒(列伝二一)、蜂蠶之毒(列伝五五)、禍生蠶毒(載記一五)。懣〔夬〕丑轄《夬開》、極也劣也又懣芥…／丑芥《皆開去》(中一三オ六)、散蕒芥之恨(列伝三八)。芥〔夬〕古押《皆開去》、辛菜名又草芥／古邁《夬合》(中一三オ六)、散蕒芥之恨(列伝三八)。噲〔夬〕苦夬《夬合》、…又人名…又姓／苦怪《皆合去》(上六オ五)、其將焦噲(帝紀七)。

(A) 『晋書音義』に見える被注字は「蕒」〔夬〕端計切《端・齊開去》、草木綴實であるが、義に拠り、何超音を『広韻』に見える「懣」字音と比較する。

(二) 《佳》《夬》 両韻通用の例。『正義』に見える。

瓊〔夬〕苦夬《夬合》、姓也晉有瓊錢／苦買《佳上》(中一八オ八)、初吳興人錢瓊亦起義兵(列伝二八)。

(A) 何超は同じ語(吳興人錢瓊反(帝紀五))に苦邁反《夬合》(上五オ二)、(子瓊官至衡陽太守(列伝四五))に苦夬反《夬合》(下三ウ五)とも注音している。

(三) 《刪・鎋》《山・黠》 両韻通用の例。『索隱』に《刪》《山》 両韻通用例が見える。

彫〔夬〕方閑《山開》／布蠻《刪合》(中一ウ七)、尚書僕射江彫議応曰太夫人(列伝二)。刮〔夬〕古頤《鎋合》、刮削／古滑

《黠合》(下五ウ四、下九オ六)、後爲其父誤刮去之(列伝五〇)、以手刮棺(列伝五八)。

(A) 本例に於ける「影」の義は『広韻』に見える義注「虎文」とは異なるが、何超は同じ語(尚書僕射江彰等四人並云(志一〇))に方閑反《山開》(上一二ウ四)とも注音している、両韻の通用を示す例として挙げる。

(四) 《庚二・陌二》《耕・麥》両韻通用の例。『索隱』『正義』に《陌二》《麥》両韻通用例が見える。

萌《広》莫耕《耕開》／亡行《庚開》(上九ウ七)、改葭萌曰漢壽(志四)。(A) 漬《広》宅耕《耕開》、水名出南海／丈更《庚開》(中四ウ四)、進封漬陽子(列伝七)。(C) 礪《広》撫庚《庚開》、小石落聲／普萌《耕開》(下一〇ウ四)、礪礪震隱(列伝六)。(B) 漢《広》一號《陌合》、濩澤縣：／烏獲《麥合》(上九オ六)、濩澤(志四)。昨《広》側革《麥開》、大聲／壯伯《陌開》(上一四オ二)、聞人爭咋不正者(志一五)。

(A) 本例に於ける「萌」の義は『広韻』に見える義注「萌芽」とは異なるが、何超は同じ語(博走葭萌(載記二〇))に莫耕反《耕開》(下一九ウ八)とも注音しているので、両韻の通用を示す例として挙げる。

(B) 『晋書音義』は「更丈反」に作るが誤写と認め、之を改める。(補注8)

(C) 何超は同じ語(漬陽(志五))に丈莖反《耕開》(上一〇ウ二)とも注音している。

(D) 『広韻』は「磅」に作る。

(四) 《咸・洽》《銜・狎》両韻通用の例。『索隱』『正義』に見える。

檻《広》胡黠《銜上》、闐也説文曰檻也：／胡黠《咸上》(上三ウ四、中二ウ七、中一八ウ九)、檻車徵艾(帝紀二)、遣御史檻車徵詣廷尉(列伝四)、群王被囚檻之困(列伝二九)。檻《広》胡黠《銜上》、禦敵船四方施板以禦矢：／胡黠《咸上》(上一

五ウ五、下五オ六、下二〇オ五、舟艦蓋川健健之謂也(志一八)、賊於艦中傍射之(列伝四九、乃大脩船艦(載記二二))。楚
〔広〕山治《治》、楚甫瑞草：／所甲《狎》(上二四ウ九、中二〇ウ七)、楚甫嘉禾(志一七)、仙芝楚甫未生(列伝一八)。

(A) 何超は同じ語(焚尚之舟艦(列伝七)、詔濬修舟艦(列伝二二))に音檻《匣・銜上》(中五オ二、中七オ九)とも
注音している。

二 A 韻⁽¹⁶⁾類とIV韻類の通用を示す例が見える。

(一) 《祭甲》《齊》両韻通用の例

礪〔広〕力制《祭開》、砥石／音麗《齊開去》(中二一ウ七、無砥礪行(列伝一九))。

(A) 何超は同じ語(砥礪乃性(列伝二五)、初雖砥礪(載記三五)に音厲《来・祭開・甲》(中二五オ八、下二一オ七)とも
注音している。

(二) 《仙甲・薛甲》《先・屑》両韻通用の例。『索隱』『正義』に《仙甲》《先》両韻通用例が見える。

綫〔広〕私箭《仙開去》、細絲：／息練《先開去》(上九オ四)、不斷如綫(志四)。(扁〔広〕方典《先開去》／音徧《仙合上》(下
一六オ六))。〔甄〔広〕居延《仙開》／音堅《先開》(中二一オ二〇))。繼〔広〕私列《薛開》、繫也左傳曰臣負羈繼：／音屑
《屑開》(中四オ四)、蒼鷹驚而受繼(列伝六)。(臬〔広〕五結《屑開》／魚列《薛開》(上一〇ウ八))。

(A) 何超は同じ語(不絶若綫(列伝二六))に私箭反《仙開去》(中一七オ六)、(不絶若綫(載記一〇))に仙箭反
《仙開去》(下一七オ三)とも注音している。

(B) 何超は同じ語(吾便爲時之所羈繼(列伝二三)、亡父脩羈繼(吳壞(列伝二七))に私列反《薛開》(中八オ七、中一

七ウ九)、(一旦縲繼(列伝一九))に音薛《心・薛開》(中一一ウ二)とも注音している。

(三)《宵^甲》《蕭》両韻通用の例。『索隱』(傍証例のみ)、『正義』に見える。

諛(広)先鳥《蕭上》／蘇小《宵上》(下一〇オ五)、韋諛字憲道京兆人也(列伝六一)^(A)。噍(広)才笑《宵去》、嚼也／祚叫《蕭去》(下一二オ五)、國仁陰山遺噍(載記三五)。

(A) 本例に於ける「諛」の義は『広韻』に見える義注「誘爲善也又小也」とは異なるが、何超は同じ語(勸黃門郎韋諛駁曰(載記五))に蘇鳥反《蕭上》(下一五ウ一〇)とも注音しているので、両韻の通用を示す例として挙げる。

(B) 『広韻』は「叫」に作る。

(四)《塩^甲》《葉^甲》《添・怗》両韻通用の例。『索隱』『正義』(傍証例のみ)に《塩^甲》《添》両韻通用例が見える。

甜(広)徒兼《添》、甘也／徒廉《塩》(下八オ九)、桑葢甜甜(列伝五〇)。厭(広)於葉《葉》、厭伏：／於叶《怗》(下三オ七)、莫不厭服(列伝四五)^(A)。

(A) 何超は同じ語(疑於屈伸厭降(志一〇))に一葉反《葉》(上一一ウ六)とも注音している。

三 A 韻乙類とB 韻類の通用を示す例が見える。

(一)《真(臻)乙》《欣》両韻通用の例。『索隱』『正義』に見える。

(影(広)府巾《真開》／甫斤《欣》(中一四オ四))。

(二)《仙乙》《元》両韻通用の例。『索隱』『正義』に見える。⁽¹⁶⁾

鍵(広)居言《元開》、…又鍵爲郡／其焉《仙開》(上一六オ六)、渠焉《仙開》(下七オ一〇、下一八ウ六、下一八オ二)、其

連《仙開》(上四オ八、上八ウハ)^(A)。軒^(B)《広》居言《元開》、…又驪軒縣在張掖／音虔《仙開》(上九ウ六、下二オ九)、驪軒(志四)、徒頭美麗軒二千餘戸而歸(載記二六)。蜺^(B)《広》以然《仙開》、蚺蜺／餘言《元開》(中三ウ九)、或蜺蜺膠戾(列伝六)。
〔繼〕《広》去阮《元合上》／去院^(B)《仙合上》(中一九ウ二)。

(A) 『晋書』正文については、声類三・一(下)に見える「鍵」を参照されたい。

(B) 『殿本』『萬曆本』は反切下字を「完」(《桓》韻字)に作るが、『和刻本』に従い之を改める。^(補注9)

四 止撰諸韻の通用を示す例が見える。

(一) 《支》《脂》両韻通用の例。『索隱』『正義』(傍証例のみ)に見える。

眠^(A)《広》承矢《脂開上・甲》、古文(視)／上支《支開・甲》(下一〇ウ八、廣雅眠視也)、眠眠者以難入爲凝清(列伝六)。飾
《広》疏夷《脂開・乙》／所宜《支開・乙》(下三ウ二)^(A)、熬以神火下以氣從(列伝四五)。標^(A)《広》力委《支合上・乙》、以盤中有隔
也／力軌《脂合上・乙》(中八オ八)、舉標擲其面(列伝一三)。瘠^(A)《広》於爲《支合・乙》、痺濕病也／於佳《脂合・甲》(上六ウ四
；字林瘠痺也、中四ウ九)、誣帝在藩夙有瘠疾(帝紀八)、瘠疾不能御婦人(列伝七)。圯^(A)《広》符鄙《脂合上・乙》、岸毀又覆
也／普弭《支開上・甲》(下一〇ウ二)、衆塗圯塞(列伝六)。〔祇〕《広》旨夷《脂開・甲》／音支《支開・甲》(中一一ウ三)。

(A) 『晋書音義』には「從與飾同所宜反」と見える。「從」は《広》所宜切《生・支開・乙》、下物竹器又所綺切。

(二) 《支》《之》両韻通用の例。『正義』に見える。

倚^(A)《広》居綺《支開上・乙》、倚角／居起《之開上・乙》(下一五オ二)、與石勒爲倚角之勢(載記三)。嶠^(A)《広》丑知《支開上・中》、
嶠無角如龍而黃…／丑之《之開・甲》(上一二ウ五、中一六オ九、下二オ八)、御群龍勒嶠武(志一三)、青虬赤嶠(列伝一

五、楹彫虬獸節鏤龍螭(A)〔載記三〇〕。食〔広〕羊吏〔之開去・中〕、人名漢有酈食其〔支開去・甲〕〔下一五ウ七〕、聞酈食其勸立六國後(載記五)。蟻〔広〕魚倚〔支開上・乙〕、整舟向岸／魚嗣〔之開去・甲〕〔下四オ五〕、王彬蟻船(列伝四六)。

(A) 何超は同じ語(又有秦始皇藍田玉璽螭。獸鈕志一五)、玄螭。狡獸嬉其間(列伝三〇)、画螭。魅以為巧(列伝四五)に丑知反〔支開・中〕〔上一四オ三、中一九ウ一、下三ウ二〕とも注音している。

(B) 『殿本』『萬曆本』は反切上字を「思」(〔心〕母字)に作るが、『和刻本』に従い之を改める。(補注10)

〔三〕『支』『微』両韻通用の例

戲〔広〕許羈〔支開・乙〕、於戲歎辭〔音希〕『微』〔上三ウ七〕、於戲王其欽順天命(帝紀三)。蟻〔広〕魚倚〔支開上・乙〕、同〔螳〕／魚豈〔微開上〕、蟻狄縱毒於神州(列伝三二)。

(A) 本例は『広韻』で何超音と同音を示す通用字「螳」も求められる。尚、何超は同じ語(譬之於蟻。行磨石之上志二)、於是当蟻封内試之(列伝四五)に魚倚反〔支開上・乙〕〔上七ウ五、下三オ五〕、(今杜弼蟻聚湘川(列伝四一))に魚綺反〔支開上・乙〕〔下一オ七〕とも注音している。

〔四〕『脂』『之』両韻通用の例。(17)『索隱』『正義』に見える。

胎〔広〕與之〔之・甲〕、盱眙縣〔與夷〕『脂開・甲』〔中二三オ四〕、退保盱眙(列伝四〇)。(A)峙〔広〕直里〔之上・中〕、具也又峻峙／直几〔脂開上・乙〕〔中八オ八〕、下可以成鼎峙之事(列伝一五)。(B)砥〔広〕職雉〔脂開上・甲〕、砥礪也〔音止〕〔之上・甲〕〔中二オ二〕、聞者莫不砥礪(列伝三)。(C)〔郗〕〔広〕丑飢〔脂開・乙〕／丑之〔之・甲〕〔中五オ三〕。

(A) 何超は同じ語(徐州刺史下敦退保盱眙。帝紀六)、或居盱眙(志四)、淮陰盱眙(載記一三)に與之反〔之・甲〕

(上五ウ七、上九オ八、下一八オ二)とも注音している。

(B) 何超は同じ語(亦稱衍巖巖清峙(列伝二三))に直里反《之_中》(中八オ九とも注音している)。

(C) 何超は同じ語(無砥礪行(列伝一九、砥礪乃性(列伝二五)、砥礪自脩(載記二四)、初雖砥礪(載記二五)、に音旨《章・脂開上・甲》(中二ウ七、中一五オ八、下二〇ウ八、下二一オ七)とも注音している)。

(D) 《脂》《微》兩韻通用の例。『索隱』(傍証例のみ)、『正義』に見える。

〔檀(広)又音達《羣・脂合・乙》、説文曰九達道也…/渠達《微合》(下三オ九、從弟檀早亡(列伝四五))〕。

(A) 何超は固有名詞の「檀」(孚弟檀字季達(列伝七)、侯將檀率騎二十餘萬(載記二二))に渠追反《脂合・甲》(中四ウ二、下二〇オ八)とも注音している。

五 咸摂の《蔽》《凡》兩韻の通用を示す例が見える。

汜(広)符咸《凡》、國名又姓…/符蔽《蔽》(中一八オ一)、吳遣虞汜爲監軍(列伝二七)。

(A) 『切韻』の体系では《蔽・業》韻と唇音との結合は見られない。

六 唇音を声母とする《虞》《尤》《模》韻の通用を示す例が見える。

(一) 《虞》《尤》兩韻通用の例。『索隱』『正義』に見える。

枹(広)縛謀《尤_乙》、鼓槌/音孚《虞_乙》(中一七ウ三)、枹鼓鼙鳴(列伝二六)、音孚《虞_乙》(下一三オ九)、因振袖揚枹(列伝六八)、甫于《虞_乙》(上八オ一)、旗端四星南北列曰天桴鼓桴也(志二)。枹(広)縛謀《尤_乙》/甫于《虞_乙》(上六オ三、

上一六オ三)、使其子胤侵枹罕(帝紀七)、張祚枹罕(志一九)。

(A) (D) は声類二(二)に見える注(A) (D) のそれぞれを参照されたい。

(二) 《模》《尤》 両韻通用の例。

枹〔広〕縛謀《尤》、鼓槌／芳呼《模》(中一九ウセ、援枹曹衛〔列伝三二〕)。

(A) 反切下字を『萬曆本』は「乎」(《模》韻字)、『和刻本』は「于」(《虞》韻字)に作る。⁽¹⁸⁾『和刻本』に従え

ば(一)の項に移される。^(補注11)

七 脣音を声母とする《侯》《尤》 両韻の通用を示す例が見える。

〔梏〕〔縛〕謀《尤》／片口《侯》(上七ウー〇)。

八 全濁音を声母とする去・上両声の混同を示す例が見える。『索隱』『正義』に見える。

斂〔広〕徒對《灰》、矛下銅也…／徒猥《灰》(上一五オ五)、其後稍施其斂(志一七)。梏〔広〕巨救《尤》、尸梏…／音

曰《尤》(中二ウ六)、遺令不得以南城侯印入梏〔列伝四〕。^(A)

(A) 何超は同じ語(収艾尸梏〔列伝一八〕に音舊《尤》(中二〇ウ六)とも注音している。

〔II〕 『慧琳』の反切には現われていない特徴

〔A〕 近世北方音の特徴として説き得るもの

一 I 韻類とII 韻類の通用を示す例が見える。

(一) 山摂の《寒》《刪》 両韻通用の例

刪〔広〕所姦《刪》、除削也…／所奸《寒》(中八ウ六)、考覈舊文刪省浮穢〔列伝一四〕。菅〔広〕古顔《刪》、草名…／

音奸《寒》(上一六ウ四)、雖有絲麻不棄膏刪(志二〇)。^(A)

(A) 何超は同じ語(編菅爲禪室(列伝六五))に古顔反《刪開》(下一二〇一〇)とも注音している。

(二) 山攝の《寒》《山》両韻通用の例

痺(広)都寒《寒開》／多簡《山開上》(中二二〇九)、秀惟痺惡(列伝二〇)。^(A)

(A) 本例に於ける「痺」の義は『広韻』に見える義注「火痺小兒病也」とは異なるが、何超は同じ語(彰善痺惡(列伝五二))に多阜反《寒開上》(下六ウ八)とも注音しているので、両韻の通用を示す例として挙げる。

(三) 效攝の《豪》《肴》両韻通用の例

礲(広)五交《肴》、破礲城名…／五勞《豪》(下五〇八、下一八〇一〇、下一九〇一)、濟北太守丁匡據礲(列伝四九、載記一四)、屯于礲礲津(載記一六)。

(四) 咸攝の《談》《銜》両韻通用の例。『正義』に見える。

啖(広)徒敢《談上》、同(噉)／徒檻《銜上》(中八ウ三)、餘肉可共啖之(列伝一三)。

(五) 宕攝《唐》江攝《江》両韻通用の例。『索隱』に相当入声韻の《鐸》《覺》両韻通用例が見える。

檻(広)古雙《江》、舉鼎…／音剛《唐》(上一三ウ八)、次檻鼓中道(志二五)。厯(広)莫江《江》、厚也大也／音芒《唐》(上一六ウ四)、古者敦龐善否區別(志二〇)。^(B)

(A) 『広韻』は「扛」に作る。

(B) 被注字を『殿本』は「龐」(広)薄江切《並・江》、姓也…に、『萬曆本』『和刻本』は「癭」(広)莫江切

《明・江》、病困^{〔補注也〕}に作るが、音及び義に拠り之を改める。尚、『説文』には「龐高屋也」^{〔補注也〕}、段玉裁『説文解字段氏注』には「龐高大也爲高屋引申之義」と見える。

二 止・蟹両摂の通用を示す例が見える。

(一) 《脂甲》《齊》 両韻通用の例

齊〔広〕徂奚《齊開》整也中也……子夷《脂開》(中一五ウ九、我纂斯齊〔列伝二五〕、音資《脂開》(上一一ウ七、上一二ウ四)、三年之喪始同齊斬〔志一〇〕、以膏齊斧〔志二三〕。髻〔広〕渠脂《脂開》、馬頂上髻也／巨黎《齊開》(中一七オ一)、紫翼青髻〔列伝二五〕。兕〔広〕徐姊《脂開上》、爾雅曰兕似牛……徐姊《齊開上》(下一オ九、況狼兕之寇乎〔列伝四〕)。^(B)

(A) 何超は同じ語(軒髻。躍鱗載記一)に渠脂反《脂開》(下一四オ一〇)とも注音している。

(B) 何超は同じ語(何異放兕。豹於公路〔列伝一六〕、獸兕出檻〔列伝二二〕)に徐姊反《脂開上》(中九ウ八、中二三ウ四)とも注音している。

(二) 《之》《齊》 両韻通用の例

寛〔広〕五計《齊開去》、虹／五異《之去》(中二ウ五)、高山尋雲寛〔列伝四〕。〔抵〔広〕都礼《齊開上》／都里《之去》(中四オ四)〕。〔釐〔広〕里之《之》／音黎《齊開》(上一五ウ六)〕。

(三) 《支》《祭》 両韻通用の例

〔革〔広〕府移《支開・甲》／音蔽《祭開・甲》(上一三オ七)〕。

(A) 『広韻』は「簞」に作る。

三 遇撰の《魚》《虞》兩韻の通用を示す例が見える。『正義』(傍証例のみ)に見える。

偃〔広〕於武《虞上・之》、不伸也…於語《魚上・之》(下二ウ一：不伸也)、以偃舞豪彊(列伝四三)。迂〔広〕憶俱《虞甲》、曲也／憶居《魚乙》(下二一オ四)、望其俛首就羈不亦迂哉(列伝六二)。鬚〔広〕相翕《虞甲》、…説文曰面毛也…相余《魚甲》(中二ウ六)、帝涕淚霑鬚(列伝四)。^B璵〔広〕以諸《魚甲》、魯之寶玉／音于《虞乙》(中二ウ三)、季孫璵瑤比之暴骸(列伝二二)。^C〔効〕〔広〕其俱《虞乙》／其居《魚乙》(下一オ九)。^B〔獮〕〔広〕救俱《虞乙》／救居《魚乙》(上四ウ七)。

(A) 『広韻』は「迂」に作る。

(B) 何超は同じ語(髭鬚。蔚然(志一九)、觸猛獸之鬚(列伝一七)、又好帛繩纏鬚(列伝二四)、美鬚髻(列伝三七)、鬚鬢皓白(列伝四六)、比詵鬚。鬚盡白(列伝五〇)、自理鬚鬢(列伝五四)、見一父老鬚。髮皓然(載記一四)、鬚髻不過百餘根(載記三))に相翕反《虞甲》(上一六オ九、中一〇オ九、中一四ウ八、中三二オ三、下四オ一、下五ウ七、下七オ八、下一八ウ二、下一五オ二)とも注音している。

(C) 何超は同じ語(必能垂光璵。璵矣(列伝三九)に音余《魚甲》(中二ウ二)とも注音している。

四 甲：乙の対立の混乱を示す例が見える。

(一) 《塩甲》《凡乙》兩韻通用の例

覘〔広〕丑豔《塩去》、…説文云闕視也…救劔《凡去》(上二ウ一〇)、既而使人覘之(帝紀二)。^A

(A) 何超は同じ語(或有夜覘。視之云(志一八)、竊覘之(列伝三五)、浚怪使覘之(列伝六六)に勅艶反《塩去》(上一五ウ六、中二一オ三、下一二ウ五)とも注音している。

(一) 《葉^甲》《業^乙》 兩韻通用の例

怯〔広〕去劫《業》、畏也／去業《業》(中六ウ三)、駿素怯儒不決(列伝一〇^B)。〔脇〕〔広〕虛業《業》／虛業《業》(下七オ四)^C。

(A) 或は「業」(《業》韻字)の誤写か。^[補注13]

(B) 何超は同じ語(諸君怯慚乃是譽賊(列伝七〇))に去業反《業》(下一四オ五)とも注音している。

(C) 『広韻』は「脅」に作る。

(三) 《幽^甲》《尤^乙》 兩韻通用の例。『索隱』『正義』(傍証例のみ)に見える。

彪〔広〕甫焦《幽^開》／甫休《尤^開》(上六オ五、中八ウ二)、甫尤《尤^開》(上二ウ一〇、下四オ一)。

(四) 《祭^乙》《齊^甲》 兩韻通用の例

瘞〔広〕於劇《祭^開》、埋也／於計《齊^開去》(下一二ウ四)、初孫氏瘞于黎陽(列伝六六^A)。

(A) 何超は同じ語(乃曰亡兒瘞。此(列伝四五))に於例反《祭^開・中》(下三ウ一)とも注音している。

(四) その他、韻類〔I〕四(一)「痿」〔四〕「埒」、〔II〕三「璵」に見える音注。

五 輕唇音化に伴う介母の消滅を示す或は解される例が見える。『正義』に見える。

腐〔広〕扶雨《虞^上》、朽也敗也説文爛也／扶古《模^去》(下一四オ一)、時將欲腐敗(列伝七〇)。

〔B〕 近世北方音の特徴としては説き難いもの

一 流撮《侯》效撮《肴》 兩韻の通用を示す例が見える。

轄〔広〕古侯《侯》、臂捍／古交《肴》(中一六オ一〇)、何以效其撮東郭於轄下也(列伝二五)。

二 声調の混淆を示す例が見える。『索隱』『正義』に見える。

(一) 平・上両声の混淆を示す例

▽全清声母

葦〔広〕玆損 〔魂上〕、草叢生兒／音尊 〔魂〕（中三ウ五）、禾卉莽葦以垂穎（列伝六）。穎〔広〕蘇朗 〔唐開上〕、頷也／蘇郎

〔唐開〕（下四ウ二）、率子弟素服詣闕稽顙（列伝四七）。瘡〔広〕都寒 〔寒開〕／多簡 〔山開上〕（中一二オ九）。

(A) 或は「朗」の誤写か。^{〔補注14〕}

(B) 何超は同じ語（雖稽顙執贄（列伝二二）、稽顙歸誠（列伝五〇））に蘇朗反 〔唐開上〕（中一七オ五、下五ウ五）、稽顙。泣請帝留攸（列伝二二）に蘇黨反 〔唐開上〕（中七オ七）とも注音している。

(C) 韻類〔II〕〔A〕一(一)の「瘡」を参照。

▽全濁声母

桁〔広〕胡郎 〔唐開〕／胡朗 〔唐開上〕（中二ウ七）、嶠燒朱雀桁以挫其鋒（列伝三七）^(A)。邊〔広〕土滅 〔咸上〕、邊濤／土威

〔咸〕（中一六オ二）、遊鱗邊濤（列伝二五）。莞〔広〕胡官 〔桓〕、東莞郡名：／胡管 〔桓上〕（上五ウ二）、徐龜寇東莞（帝紀六）^(B)。

砥〔広〕承矢 〔脂開上〕／上支 〔支開〕（下二〇ウ八）^(C)。

(A) 本例に於ける「桁」の義は『広韻』に見える義注「械也」と異なるが、何超は同じ語（燒朱雀桁（帝紀六））に胡郎反 〔唐開〕（上五ウ八）とも注音しているので、両声混淆の例として挙げる。

(B) 何超は同じ語（東莞郡（志五））に音丸 〔桓〕（上一〇オ二）とも注音している。

(C) 韻類〔I〕四(一)の「𦵏」を参照。

▽清濁声母

𦵏〔𦵏〕落侯《侯》、縣名／カ口《侯上》(上一〇ウ二)、羸𦵏(志五)。名〔𦵏〕武并《清開》、…成也大也功也…／無𦵏《清開上》(中二オ五 相名目也)、厲聲名公(列伝二〇)。𦵏〔𦵏〕五巧《肴上》、𦵏也／五交《肴》(中一六ウ六)、口𦵏霜刃(列伝二五)。〔𦵏〕𦵏〔𦵏〕如招《宵》／而小《宵上》(下一〇ウ三)。〔𦵏〕𦵏莫迴《青開上》／莫𦵏^(A)《青開》(中一六ウ三)。

(A) 或は「冷」(《青開上》韻字)の誤写か。^(補注15)

(二) 平・去両声の混淆を示す例が見える。

▽次清声母

𦵏〔𦵏〕七肖《宵去》／七遙《宵》(上一五オ六)。

▽全濁声母

排〔𦵏〕步皆《皆開》、推排…／蒲芥《皆開去》(中二ウ七)、又作人排新器(列伝四)。

▽清濁声母

案〔𦵏〕亡運《文去》、亂也／音文《文》(上四オ九)、彝章素廢(帝紀三)。

(三) 上・去両声の混淆を示す例が見える。

▽次清声母

𦵏〔𦵏〕敷沼《宵上》、青黄色也／匹妙《宵去》(中一五オ一〇)、葱𦵏服于𦵏𦵏今(列伝二五)。〔𦵏〕𦵏他𦵏《蕭去》、視也／

他鳥^レ蕭^上（下一四オ三）、眺以爲然（列伝七〇）。慨^レ広^上苦蓋^レ哈^去、慷慨／音愷^レ哈^上（下一〇ウ二）、中矯厲而慨^レ（列伝六二）。

（A）何超は同じ語（此賈誼所以慷慨。於漢文（列伝一八）、此一時愚智所慷慨也（列伝四五）に苦愛反^レ哈^去（中一〇ウ六、下三オ一〇）、（緬然慷慨（列伝二九）に苦蓋反^レ哈^去（中一九オ一）と注音している。

▽清濁声母

輾^レ広^上女箭^レ仙^{開去}、水輾／尼展^レ仙^{開上}（中一六ウ二）、越奔沙輾流霜（列伝二五）。燄^レ広^上以冉^レ塩^上／以瞻^レ塩^去（下九オ七）、煙焰已交（列伝五八）。

（A）『晋書音義』には「焰與焰同以瞻反」と見える。「焰」は^レ広^上以瞻切^レ塩^去光也。

以上示したところにより、何超『晋書音義』には、「資料表」で見られるように、上字・下字共に『広韻』と同一の文字を用いた反切が多く得られる反面、『切韻』の体系からずれた音注例も亦混在していることが明らかとなった。⁽²¹⁾この様相は、『晋書音義』が基本的には『切韻』に準拠しながらも、唐代を通じて生じた、或は進行しつつあった改変をその中に織り込んだ姿を示すものと解されよう。そして、そこに反映する音韻的特徴は、上掲の例証に徴して明らかのように、成書時を略同じくする『索隱』及び『正義』から窺える特徴と質的には斉一であり、⁽²²⁾この事実、恐らくは唐儒等の間で専ら行なわれていたであろう字音が、『切韻』の拠った規範と同時に併存していたとする仮定を許す性質のものではあるまいか。⁽²³⁾勿論これは一往の推測であり、更に未整理資料の調査・研究

を補いつつ検討が続けられなければならないが、少なくとも『晋書音義』の整理結果はこの仮定を容認するものと思われる。

一方、右に示したような「投影法」に拠る整理に加えて、他の音義類との比較・対照が唐代字音の実相を探る上で材料を提供する場合がある。例えば、対照される音義類をこれ迄に一往の整理を見たものに限定し、『晋書音義』から幾つかを採って示せば、譚之輒反又而涉反(上九〇六、「狐譚」志四)の、『切韻』には載録されていない之輒反の音は顔師古『漢書音義』(以下『漢書』と略称。之涉反「狐譚縣名…」志八上)に、又、音義共に『切韻』とは異なる、薄丑芥反(中二二〇九、「薄芥」列伝三八)の音注は『漢書』(丑芥反「薄芥」列伝一八)に、同様に『切韻』には見えない音義、霧亡豆反(上一六〇七、「四者皆失則區霧無識」志一九)⁽²⁵⁾も『漢書』(莫豆反「四者皆失區霧無識」志七下之上)にそれぞれ求められるが、これ等の例は古籍に見える文字の読音の伝承系譜を探る上で参考となるであろう。

又、固有名詞などに関する音注で、『切韻』との比較に留まる限りでは体系上のずれを示すと解釈し得る例も、他の音義類との対照によって、それが或は師資相伝の伝承として受継がれた特別の読音を示すに過ぎないのかと疑われてくるものも有る。例えば、嚳力口反又力主反(上一〇五四、「羸嚳」志五)は『切韻』への投影では平・上両声の混淆を示すが、『漢書』の來口反(「羸嚳縣名…」志八下)を見れば、或は特別の読音であるがための殊更の音注かとも疑われるし、又、先に《見》《羣》両母の混同、《仙》《元》両韻の通用を示す例として挙げた、鍵其連反、其焉反、渠焉反も、『正義』の其連反(「鍵爲郡…」列伝六三)を参照するならば、両音義共、音韻変化には関

わりなく単一の伝承音を示したものと解されるべきかも知れない。更に、固有名詞ではないが、魄音簿（上七ウハ）なども『漢書』の「鄭氏曰魄音簿…師古曰…鄭音是也（列伝二三）」、『索隱』の「鄭氏音簿（列伝七三）」を対照すると、『晋書音義』も鄭音を無断で採ったものと解されそうである。この様な例は尚得られる。

以上挙げた様な事柄は単に一資料の整理のみに留まっていたは探り得ないところであり、資料相互の比較・対照研究は「投影法」による調査・研究と相俟って肌理の細かい字音研究に一步近づかしめるものと思われる。本稿で示した例証は、そのような意味からも、唯『晋書音義』に反映する特徴の一端に過ぎず、音義類全書に互る総合的且つ多角的な研究は亦唐代音韻史研究に与って参考とさるべき新たな資料を提供するものと思う。今後の研究に俟つところである。

註

(1) 註(23)を参照。

(2) 唐代に著わされた音義類を便宜上二種に大別する。一つは仏僧による『一切経音義』であり、他は儒者等によって史籍その他に付された音義注である。ここで言う第二種音義類とは後者を指す。

(3) 何超『晋書音義』は房玄齡等奉敕撰『晋書』一三〇巻に見える難字に対する注釈であって、「上」（紀志）、「中」（列伝上）、「下」（列伝及載記）の三巻より成る。注者の何超については、管見の及ぶ限りでは、『唐書卷五八、芸文志四八』に「何超晋書音義三卷処士」と記載されているの

みで、生没年を始めその事歴は不詳である。又、『晋書音義』の正確な成書時も不明であるが、天王左史弘農楊齊宜字正衡の手に成る「晋書音義序」の序末に「唐天宝六載」と見えることから、本稿は成書時を西暦七四七年頃と推定しておく。尚、本稿ではテキストとして、殿本二十四史所収のもの（以下『殿本』と略称）を用い、校勘のために万曆二十四年刊二十一史所収のもの（以下『萬曆本』と略称）、及び松会堂刊本（汲古書院覆刻本、以下『和刻本』と略称）を併せ見た。

(4) 以下、細部を除き、『広韻』（周祖謨『広韻校本附校勘記』中華書局、一九六〇）を以て『切韻』に代用させる。

(5) その他の音注例に關しては、拙稿「晉書音義音韻考——資料表——」(以下「資料表」と略称)北海道大学文学部紀要二四・一、二二(近刊)を参照されたい。

(6) 当該音注例の『殿本』に見える個所を、卷・丁・表(オと略記)、裏(ウと略記)の別・行、の順に示す。又、必要有る時は被注字の見える文脈をその次に示す。

音義注の様な断片的資料を扱うに当たっては、被注字を語として捉えることが肝要である。(拙稿「顔師古漢書音義韻類考」『言語研究』五九、一九七一、四五—四六頁参照)。従って、音注のみで義注の与えられていない被注字は総て文脈を拠所としてその所としてその意味を探る必要がある。唯、『晉書音義』には被注字の『晉書』正文中に見える該所が明確には示されていないので、本稿では被注字相互の前後關係を主な手掛りとしてその該所を比定した。本稿で見られる文脈はこの様にして得られたものである。尚、該当すると思われる個所が、極めて近い位置に二つ以上見られる場合には便宜上一つのみを採って示す。

(7) 輕唇音声母は『切韻』『広韻』の体系では認められないが、本稿では便宜上設けてある。

(8) 『広韻』の義注とは合致しないが、音韻体系上のずれが音韻変遷に添った様相を呈する音注は傍証例として一内に入れて示す。傍証例についての義注、その見える文

脈は、特に必要のない限り、「資料表」に譲る。

(9) 同じ語の音形はいつも同じであるのが原則である。従って、同じ語の音を表わすために用いられた文字は文字が違っても同音と考えられるから(橋本進吉『国語音韻史(講義集一)』岩波書店、一九六六、二八六頁参照)、本稿で扱うような断片的音韻資料に見えるこの様な例は貴重である。

(10) 『晉書音義』に△並仄△△幫△兩母が又音として並記されている例も見える。「李」音佩△並・隊△又ト内反△幫・隊△(上三ウハ)。尚、顔師古『急就篇注』などには、「緘」馳二反又丈致反(何れも△澄△母△脂去・甲△韻)、「緇」始移反又式支反(何れも△書△母△支甲△韻)、「篇」市緣反又市專反(何れも△常△母△仙甲△韻)のように、『切韻』の体系に拠って整理する限りでは又音が必ずしも異なった音を示すとは解されない音注も見えるので、又音については改めて考えてみたい。

(11) 全濁声母の変化の在り方として一般に説かれているところに従えば、本例及び以下の三・一(内四)、三・二(内四)は例外となる。

(12) 『説文』及び『説文』に關する所説の引用は、丁福保編『説文解字詁林及補遺』台湾商務印書館、一九五九、に拠る。

(13) 『晋書音義』に△定仄△透△兩母が又音として並記されている例も見える。「闕」徒蓋反△定・蓋△又土蓋反△透・蓋△(上二三ウ六)。或はt-(↑d 仄) : t 乙の対立を示すものか。

(14) 以下に見えるII、III、A、III、B、IV韻類と共に『広韻』韻類の便宜的な類別名である。その内容については、拙稿「史記索隱・正義音韻考」前掲論文、注(29)、「同一資料表」北海道大学文学部紀要二二ノ二、一九七三、凡例、を参照されたい。尚、韻目は平声韻を以て上、去声韻を兼ねさせる。但し、去声韻のみの韻はその韻目を記す。

(15) 必要有る時は、等韻図で四等欄に置かれる韻には甲の、三等欄に置かれる韻には乙の、甲：乙の対立に関して中立と解される韻には中の小字をそれぞれ付して示す。詳しくは、河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」『言語研究』三一九三九、三根谷徹「韻鏡の三・四等について」『言語研究』二二・二三、一九五三、などを参照。

(16) 『晋書音義』に△仙△△元△兩韻が又音として並記されている例も見える。「樾」其輦反△仙開・中△又其偃反△元開・乙△(上八ウ四)。或は甲：乙の相違によってのみ対立していることを示すものか。因に、朝鮮漢字音では△来△母は甲類の扱いを受けている。

(17) 『晋書音義』に△脂乙△△之甲△兩韻が並記されてい

る例も見える。「樾」補凡反△脂上・乙△俾以反△之上・甲△(上六ウ七)。或は甲：乙の相違によってのみ対立していることを示すものか。

(18) 付言すれば、『和刻本』には、偏於武反(△殷本)は於語反に作る、悲於避反(△殷本)は胡桂反に作る)の様に、切韻系韻書に従って原本の音注を改めたとも疑われる音注が少なからず見えるので、その取扱いは注意が肝要であると思う。

(19) 付言すれば、何れも正齒二等以外の字について見られる通用例である。

(20) △幽△韻唇音字を乙類とする論も有る。平山久雄「中古漢語の音韻」『中國文化叢書 言語』一九六七、大修館、一五一頁参照。

(21) 或は誤写かとも疑われる音注字を含む音注例を除外しても、大勢は変わらない。

(22) 一例を示すならば、本稿で止・蟹兩撰の通用を示す例として挙げた△脂甲△△齊△兩韻、△之△△齊△兩韻、△支△△祭△兩韻の通用例は『索隱』『正義』からは得られないが、これを補うものとして、△支甲△△齊△兩韻、△支合△△灰△兩韻、△微合△△灰△兩韻の通用例がそこには見える。我々の資料は断片的音義注であって声韻全般を網羅する音注例は期待し得ないこと、何れの資料にも止

撰諸韻の通用例が見えること、などを併せ考えるならば、その細部に相違は見られても、止・蟹両撰の合流という事象に添う点で、これ等は質的に同じと言える。

(23) 前論では、『切韻』或は『慧琳』などの準拠した規範とは別の字音体系と述べたが、断片的な音注例に拠って体系を知ることが殆んど望み得ないこと、又、『慧琳』が或る規範に従いつつ編まれたとするには尚究明さるべき点が残されている様に思われること、などから、本稿ではそれを、前論の表現に倣えば、『切韻』の準拠した規範とは別の字音の伝承』のように改めてある。

(24) 劉復等編『十韻彙編』一九三六、北京大學、に見える略称に従って(以下同様)示せば、「王二」「王三」都計反、草木実綴。「唐」許計反、草木綴実。「広」都計切、草木綴実。

〔五〕莫弄反、天氣下地氣不応又云細雨也似霧。

「広」(一)莫紅切、同霽、(二)莫弄切、天地下地不応曰霧。

(26) 韻類〔Ⅱ〕〔B〕二(一)參看。「王」(一)落侯反、鼎名、(二)

立主反、羸隸鼎名……。王二(一)落侯反、鼎名、(二)力主反

羸隸羸隸縣名在交趾。〔切二〕力主反、羸隸縣名在交趾。

〔補稿〕前論成稿後、第一種音義類に関する論文として、慶谷寿信「敦煌出土の音韻資料」(上)(中)(下)『人文學報』七八(一九七〇)、九一(一九七三)、九八(一九七四)が

発表されたので、前論註(5)を補ってここに挙げる。

〔補註1〕（本稿脱稿後に上梓された『晋書』中華書局、一九七四、巻末に付印されている『晋書音義』に見える音注の中、本稿で問題とした音注に限って、その在り方を余白を借りて一往示しておく（以下同様）。『和刻本』『萬曆本』に同じ。

〔補註2〕『和刻本』に同じ。

〔補註3〕『和刻本』に同じ。

〔補註4〕 上字を「昨」に作る。

〔補註5〕 上字を「慈」に作る。

〔補注6〕『和刻本』に同じ。

〔補註7〕上字を「呼」に作る。

〔補註8〕「瀆丈耕反」に作る。

「補註9」
「和刻本」に同じ。

「補註10」 鱧魚綺反に作る。

「補註11」
「和刻本」に同じ。

『和刻本』『萬曆本』に同じ。

〔補註13〕 一怯去葉反 一奢虛業反 〔注〕 作

「補註1」 下字を「一郎」に作る

「補記1」 下字を「冷」に作る

(校正に際して記す)